

# 第7章

残っていた色紙・短冊より

(順不同・重複あり)

亡き人の庭に植ゑたる柿の木に生りし実いただく七回忌来て

消息のようやく知れし教え子も来るとふ今日の集ひに出でゆく

墓地近き井戸の真清水この夏のひでり長きに水位変らず

朝夕に忘れてならぬ服薬のありて八十路にわれは近づく

敬老の日にはかならず来る電話「今さっぼろよ」と孫の声聞く

ふるさとは合併決まりて新しき市の内の町となる日近づく

新しき車に夫とわれを乗せ子は走らせぬ花野に向かひて

わが町より「ラジオ体操」の生放送いそいそと吾もグラウンドに向かふ

高齢者チームにわれも加はりてボールを追ひをり秋空の下

古稀過ぎていよいよ日々を大事にと友の便りのことばをいただく

転勤してこの島去りていく人の今宵うたへる木曾節聞きをり

ジンジャーも庭に植ゑよと賜ひける人を偲ばむ白き花匂ふ

五稜郭にこもりし武士ら汲みし井の跡をかこみて咲く風蝶草

観月会始まりゐるらし山上に太鼓打つ音風に乗りくる

わが庭にピラカンサスの実が赤かりしと遠き日を恋ふ電話に友は

紅萩をゆらし風過ぐこの萩を賜ひし人のふと偲ぼるる

夕方になりて日の射す崖下につはぶきの花の黄がかがやくも

ふるさとの島町なりて五十年を祝はむ共に過ぎ来し月日

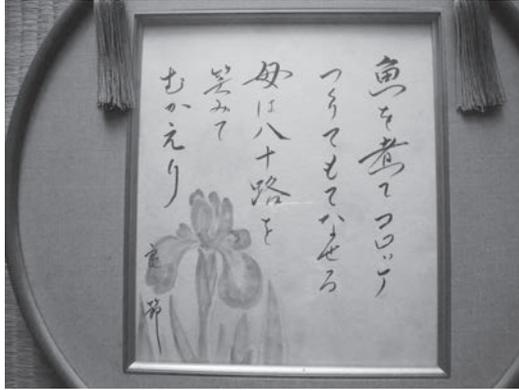
「体育の日」にて賑はふグラウンドにわれも木球思ひきり打つ

すこやかに在る今の中に遠きわれを訪れたしと友のたよりは

株分けてもらひし萩の咲きにけり花すくなけれど紅のいろ濃く

移りゆきし人の残せるホトトギス秋ふかまりし庭に咲きつぐ

魚を煮てコロツケづくりもてなせる母は八十路を笑みてむかえり



歌は良子作、絵は妹・節子作



西新デイサービスにて



夫・四十九日の法要時（平成 26 年）



夫・三回忌の法要時（平成 28 年）



ひ孫・七海を抱いて（平成 27 年）



子供たちとの食事会（平成 27 年末）



ひ孫も交えて（平成 30 年正月）